
東方黒絵巻

藤原みずな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方黒絵巻

【Nコード】

N8767I

【作者名】

藤原みずな

【あらすじ】

東方project二次創作、幻想入り小説です。

東方極光抄

ここは幻想郷。

人の住む現実の世界とは少しだけ離れた場所にある幻想の土地。

ここは現実の世界との繋がりは殆ど無い。

それは、幻想郷全体を覆う結界のせいである。

その結界を管理しているのは他でもない、言わずと知れる楽園の巫女、『博麗霊夢』

これから語られるのは、霊夢と幻想郷の住人の間に起こった、ある事件の話である。

第一話 幻想郷

「ふう…」

ここは博麗神社

神主である博麗霊夢が幻想郷の結界を守り、そして定住している場所。

神社といっても参拝客などが訪れる事は稀であり、現在お賽銭は非常に悲惨な状況なのである。

「暇ね…」

霊夢は動かしていた箒を止め、どこか遠くを見つめてそう呟いた。

「毎日毎日掃除したってお賽銭が増える訳でもないし、少しくらい納める奴がいたっていいじゃない」

箒をその場に置き、のそのそと縁側に向かって座りこんだ。

「最近は紫達も何も仕掛けてこないし、ほんと何もする事がないわ」
縁側に座り、空を見上げる。

「ほう、そんなに独り言を話しているなら誰も暇そうなんて思わないぜ」

そう言つと何かがふわふわと空から降りてきた。

「ふん、そもそも独り言なんて暇な奴しか言わないじゃないの」

地に降り立ったそれに、冷めた目をして霊夢は答えた。

「と言つ事は、少なくともお前は独り言を言つ暇があるという事じゃないか？」

「そんな話のもうどうでもいいわ、あなたが来た時点でもう暇ではないもの。また今日も懲りずに来たのね、魔理沙」

「ああ、こつちもどっかに出かけないと暇になっちまうんでな」

彼女は『霧雨魔理沙』

幻想郷の住人の一人、普通の魔法使いである。

「だからって 私の所に来なくなたっていいのに、アリスのところがあつたんだよ」

「勿論アリスの所にだって行つてるぜ」

「ふうん…」

本当かしら…

アリスに毎回睨まれる私の身になって欲しいわ…

「ん？どうかしたのか霊夢」

「なんでもない…」

そう言つて霊夢は頭を抱えた。

「ところで何をしてたんだ？」

霊夢の様子は気にせず魔理沙は話す。

「いつも通りよ、神社の掃除して、一休み」

「へえ」

そういつと魔理沙は霊夢の隣に座りこんだ。

「毎日毎日そんなことしてると暇だろう」

魔理沙はにやけた顔でそう言った。

「別に。巫女の仕事よ」

「まあな」

少しの沈黙。

「また何か起きればいいとか考えてたんじゃないだろうな」

「当たり前じゃない」

「…考えるに」

霊夢は表情を変えることなく言う。

7

「全く物騒な奴だぜ、起きたら起きたで文句言ってるじゃないか」

「起きたら起きた、よ。起きないから言ってるんじゃない」

魔理沙はため息をついた。

「ま、いいんだけどさ。じゃあ…これはお前への朗報とってもいいのかな」

「え！？何々！？」

すると霊夢はさっきとは違って変わって、満面の笑顔で魔理沙に顔を近づけた。

魔理沙は思わず体をのけぞらせた。

「ま まあ、そんな食いつくなって落ち着け」

「いいから！早く話しなさいよ！」

「まったく…実はさっき文に聞いた話なんだが」

「文？何か異変でもあったの？」

「ああ、実は紫が現世との境界をよくいじってるんだってさ」

「ん？それっていつもやってる事と変わらないじゃない、いわゆる人さらいでしょ？」

「そうさ、けど違う事が一つだけある」

「それって？」

「紫が連れてきた以外の外来人も、勝手にどんどん流れこんで来てるって事さ」

「なにそれ？紫が開けた境界に勝手に入って来てるって事？」

「そういう事なのかも知れないな、けど紫自身も、どうしてそうなるのかはよくわからないらしい」

「なーんだ、紫が知らないんなら暇のつぶし用が無いじゃない」

霊夢はがっくりと肩を落とす。

「まーな。ま、面白そうな話には変わらないだろ？」

「まあね」

霊夢はため息をついた。

「まあそう落ち込むなって、そういう外来人の多くはどこに現れるかわからないらしいぜ」

「つまり?」

「今、その竈銭箱の中に現れる可能性だってある訳だ」

そう言っつて魔理沙は竈銭箱を指差した。

「竈銭箱に必要なのはお竈銭だけよ……」

カコンッ

「ん?」

「お竈銭!?!」

瞬間、霊夢は血相を変えて竈銭箱まで走り中をのぞき込む。

しかし中には米粒くらいの小さな石が一つ転がっているだけだった。

「」

霊夢は無言で顔を上げる。

「んな訳ないだろ？」

「そっね」

「コンッ」

「ん？」

霊夢の頭上の屋根から少量の木くずが落ちてきた。

不思議に思い霊夢が上を見上げる。

ガラガラ

ガシャーん！！！！！

「わあ！？」

もの凄い轟音が響くと同時に賽銭箱の周りに白い土煙が舞った。

霊夢の姿が確認出来ない。

「お、おい霊夢！」

どつちやら屋根の上に何かが落ちてきたようだ。

上見ると、屋根の部分が少し欠けている。

「おいおい 大丈夫かよ」

魔理沙は八卦炉を取り出しそこに弱い風を送る

しばらくすると、すぐに埃は吹き飛び、視界が明るくなった。

「おい霊夢、大丈夫か？」

そこで魔理沙はふと気がついた。

「およ？」

埃が完全に晴れたそこには

壊れた賽銭箱に顔を突っ伏している霊夢。

そしてその上に乗rieg絶している。

一人の人間がいた。

第一話 幻想郷：弐

あー暇だー。

最近何もする事が無いな…全く、腕が鈍っちまう。

前はこんな時間あまり無かったのに 紫は何やってんだぜ

あー暇過ぎる。

アリスの家は昨日行ったばかりだし…

仕様がな、パチュリーのところにでも行くか。

…いや。

私より暇な奴のところに行って暇を潰すのがいいな。

そう思って来てみたが

…一ヤッ

「これは面白くなりそうだ」

霧雨魔理沙はにこやかに微笑んだ。

……

……

……

「いたた」

「よう霊夢、大丈夫か？」

下敷きになっていた体をようやく引き抜いた霊夢に魔理沙はそう声をかけた。

「あんだねえ…、少しは手伝いなさいよ！」

霊夢はキッと魔理沙を睨みつけた。

「ああ、悪い悪い、忘れてたぜ」

「全く……」

霊夢は軋む腰を支えて賽銭箱の方に向き直った。

「ああ…私の神社があ…」

霊夢は呻くようにそう言った。

屋根は半壊。賽銭箱に至っては入れ口が押しつぶされ、ただの風呂桶のような状態だ。

「まあ気を落とすなって霊夢」

魔理沙がぼんと肩を叩く

「これが落ち込まずにいられるか！」

「ま、見てみるって」

「え…？」

霊夢は泣き目で魔理沙が指差す方向を見る

「あ…」

「多少の暇潰しにはなるんじゃないか？」

「カッと、また魔理沙は笑った。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8767i/>

東方黒絵巻

2010年10月10日22時18分発行